

報告 I

中国仏教の現状について—福建省仏教を中心に—

李学竹

(中国蔵学研究中心宗教研究所副研究員、龍谷大学仏教文化研究所客員研究員)

一、はじめに

日中両国は隣国であり、古くから友好交流の伝統がある。遣唐使とともに中国へ渡った大勢の学僧たちが中国仏教を日本に伝え、日本の伝統文化の一部となっている。しかし、中国では、宋代以後、仏教が衰弱していき、明清の中国仏教は研究と修行において禅宗と浄土に限られ、教理としての三論唯識の研究はほぼ断たれた。隋唐に撰述された三論と唯識の注釈資料、例えば吉蔵の『百論疏』や窺基の『唯識述記』などさえ失われた。近代になって、中国仏教が再び三論宗義や唯識思想の研究を取り戻し、盛んに行われたのは日本の南条文雄博士の多大な貢献があったからこそできたのである。近代中国仏教を中興したと言われる楊文会居士がイギリスで留学中の南条博士と知り合い親交し、その後、南条博士を通じて中国では失われた多くの貴重な仏典や論疏が日本から輸入された。楊文会は南京の金陵刻経処でそれらを出版し、また支那内学院を設立しそれまで断たれた唯識思想と三論宗義の研究を再開し、多くの成果を上げ人材を育成した。近代の有名な学者のほとんどは、この学院の出身である。この刻経処は40年間都合460種類の経典を出版した。その内283種類の経典は南条博士から送ってきたもので全体の約70%を占めている。もし南条博士の助けがなければ、中国近代仏教学研究はかなり遅れたであろう。

また、文化大革命後、中国仏教を復興したきっかけも日本の唐招提寺森本管長が鑑真和上像を里帰りさせたことである。文革後、1980年に鑑真和上像を迎えるために、十年ぶりに中国仏教協会を再開し、また北京の法源寺など何カ所もの寺を開放した。中国仏学院も再開して、壊滅した中国仏教を復興するために、人材育成を始めた。

このように、日中両国の仏教はお互いに影響し、助け合っており、きつては切れない縁がある。故中国仏教協会会長趙朴初先生は日中仏教の関係を“黄金の絆”と名付けている。しかしながら、中国人が日本仏教の現状について

ほとんど知らないように、日本人も中国仏教の現状についてあまり知らないという事実がある。多様な仏教を分かり合い、理解し合ってこそ、真の交流ができ、共存共栄できるのである。

今回、現在中国仏教の中で最も盛んで特色ある、また「中国僧の産地」といわれる福建省の仏教を紹介したい。福建省の仏教事情を知ることによって、中国仏教の現状の一端が理解できると考えたからである。

二、福建省仏教概況

福建省は中国の東南端にあり、東シナ海に面している。面積は12万平方キロメートル、人口は約3000万人である。仏教は三国時代に福建省に伝わり、唐と五代の発展を経て、宋代に全盛期を迎えた。元、明、清では、日本を始めとする、シンガポール、インドネシア、マレーシアなど国々との交流を活発に行い、海外への布教を積極的に進めた。近代になって、虚雲、圓瑛、弘一、太虚などの近代中国仏教の指導者が福建省を活躍の舞台とした。文化大革命中、多大な破壊を被ったが、文革後、福建省は全国に先駆け経済発展すると共に、仏教も海外の華僑の援助で著しい回復の勢いを見せた。

現在の福建仏教は以下の特徴が見られる。



福建省の地図

1、寺院が多いこと

現在福建省の寺院は約4000カ所以上あり、政府に正式に登録されたのは2133カ寺ある。現在中国漢族地域の寺院は15000カ寺ぐらいあると推測される

ので、全体の4分の1を占めることになる。福建省の寺院は数が多いだけでなく、古い歴史を持つ大規模寺院も少なくない。1983年中央政府が全国に歴史と国際的影響力のある計142ヵ寺を優先的に指定開放するとした。その中に、福建省だけで14ヵ寺が含まれ、全体の10%弱を占めている。それらの寺院は次の通りである。

黄檗山万福寺	怡山西禅寺	瑞峰林陽寺	金鷄山地蔵寺
侯雪峰崇聖寺	梅峰光孝寺	寧徳支提寺	莆田広化寺
福州鼓山湧泉寺	囊山寺	厦門南普陀寺	安海龍山寺
泉州開元寺	漳州南山寺		

そのうち、日本人にもなじみが深い黄檗山万福寺は日本に黄檗宗を伝えた隠元禅師の住した寺である。それ以外の寺院も名刹として名高く、「全国三大模範叢林の一つ」といわれている莆田広化寺、農禅一致の伝統を持つ寧徳支提寺、雲門宗の祖である文偃の師、義存禅師が開いた禅宗祖庭の雪峰崇聖寺、「福建首刹」といわれ多くの経板を蔵する鼓山湧泉寺、福建省南部の代表的名刹であり壮大な伽藍配置を持つ厦門南普陀寺などがある。

2、僧侶が多いこと

現在、中国漢族地域における僧尼の数は、正確な統計はないが、10万人前後と推定されている。そのうち福建省には約12000人の僧尼がおり、全体の10%強を占めていることになる。さらに全国には約3000人の福建省出身の僧尼がおり、各地の有名な寺院に散在している。その故、福建省は「中国僧の産地」とも言われている。

また、福建省では、尼僧以外に“梵行清信女”といわれる福建省独特の信者集団がいる。彼女らの80%は幼い時から寺院に住み、菜食独身を貫き、一生涯を仏教に捧げ、尼僧と変わらぬ朝晩勤行のほか念仏座禅などの寺院生活を送っている。しかし、髪の毛を伸ばし、在家信者と同じ格好をしている。つまり、かたちは在家で実際は寺院で出家の生活をしている。それゆえ、仏教伝統の七種類の弟子の中で、その身分はどれにも所属しないから、式叉摩那（śikṣamāṇā）と見なす人もいるし、梵網菩薩戒を受けるから、出家優婆夷（upāsikā）という変な名前を付けられた事もある。現地では、若い未婚者を清姑と呼び、結婚経験ある者を菜姑と呼ぶ。また、年寄りの未婚者を姑娘と呼び、さらに年寄りの既婚者を姑婆或は姑太と呼んでいる。彼女らの住んでいる寺を普通“菜堂”と呼び、住職を阿姑と呼んでいる。近代になって、戒律の高僧である弘一法師は彼女らのことを“梵行清信女”と名付け、以来これを正式な名前としている。

このような“梵行清信女”は主に福建省の南部におり、特にアモイと泉州などに多い。1980年代以前、閩南地区には、比丘尼や沙弥尼の姿をほとんど見かけず、80%の寺院にこのような梵行清信女が住み、その規模は数千人もいたそうである。

1980年代以後、福建省に多くの尼僧仏学院ができ、その多くは剃髪を条件としているから、勉強するために仕方がなく尼僧の格好に変わった梵行清信女が少なくない。1987年に、泉州に剃髪しなくても勉強できる泉州仏学苑が設立され、当時64名の梵行清信女が入学した。1993年から、一般の尼僧も入学を許可されるようになり、現在はこの仏学苑に梵行清信女だけでなく、全国からも尼僧が入ってきている。その影響で、多くの梵行清信女は正式な尼僧になって、上級の仏学院に入り勉強を続ける。従って、このような梵行清信女は今かなり減り、正確な統計はないが、全省では約500人いるといわれている。

ともかくも、梵行清信女の起源は今でも解明されず特異な存在であるかもしれないが、福建佛教の中の特別な現象であり、現地では彼女らは僧侶と同じように尊敬されていることは事実である。

3、仏教教育の機関が多いこと

出家の僧侶が多いので、それに対する教育も充実している。現在、福建省の中級仏学院は4カ所、初級仏学院と非公認の培训班は16カ所、全部で20カ所ある。それは次の通りである。

福建省仏学院男性部	福建省仏学院尼僧部	福鼎尼众仏学培训班
閩南仏学院男性部	閩南仏学院尼僧部	莆田江口仏学班
福安仏学班	閩東仏学苑	泉州仏学苑
太姥山律学班	楓林寺律学班	種徳寺仏学培训班
福安観宗庵仏学苑	惠安仏学苑	莆田普陀庵仏学班
涌泉寺仏学培训班	長楽農禅仏学苑	仙游菩提仏学苑
南普陀寺養正院	興化仏学班	

現在中国漢族地域には高級仏学院である中国仏学院一カ所と17カ所の中級仏学院がある。福建省だけで4カ所の中級仏学院があるから、全体の4分の1近くを占めている。4カ所の中級仏学院とは閩南仏学院とその尼僧分院、福建省仏学院とその尼僧分院である。

その中、閩南仏学院は1925年にアモイの南普陀寺に設立され、近代中国仏教の指導者といわれる太虚大師がその院長を務め、多くの人材を育成したことで知られている。台湾の印順法師やシンガポールの演培法師などがこの学院の卒業生である。



文革の時、一時中断されたが、1984年に再開され、これまで1000名以上の卒業生を送り出した。現在は男性部と尼僧部を合わせて約300人在学している。

また、20カ所の仏学院の中に、尼僧専門の仏学院や培训班が6カ所もある。これは福建省仏教教育の大きな特徴の一つである。その中、福建仏学院の尼僧分院は、1983年に設立され、中国では初めての尼僧仏学院として名を馳せた。所在地は福州の崇福寺にあり、長崎の崇福寺に由来する。

現在は約150人の尼僧が在学し、予備班、予科班、本科班、戒律研究班の4学級に分けられている。予備班とは、出家する前の在家の姿をしている女子、或は沙弥尼がここで二年間寺院生活を体験しながら勉強し、試験の合格者が予科班に進学する。学習内容は



クラスによって変わるが、予科班を例にとると、二年間以下の学課を勉強している。

百法明門論	八識規矩頌	弥陀要解	華嚴經の淨行品
經典の抜粹集	国語	声明	書道
沙弥尼律儀	天台四教儀	教觀網宗	印度仏教史
俱舍論	法華經	唯識二十頌	梵網經
無量寿經	唯識三十頌	護法論	中国仏教史
四分律戒相表記	菩薩戒本		

尼僧仏学院の普段の生活は、朝4時起床、4時半に約一時間半の朝勤行が始まり、終ってしばらく休憩して、6時半に過堂という朝食を取り、その後、部屋の整理や庭の掃除をする。8時から午前の授業が始まり、11時半に終わる。昼食後、一時間の昼休みがある。13時に午後の授業が始まり四時半に終わる。17時から晩勤行が始まり、約1時間で終わる。夕食の後、教室で自修し、21時半ぐらいに太鼓の音が鳴ると消灯して休みに入る。

また、週に半日間の肉体労働もある。芝刈りや植樹、農作業などをする。健康管理のため、時々太極拳の練習も行う。日曜日に講座があれば、それを聴きに行き、なければ自由に休める。週末の夜、テレビのニュース或は仏教関係のDVDを見ることができる。

月に二回布薩を行い、戒本を読誦し、犯した戒律を懺悔する。また、夏三ヶ月間の安居期がある。このように、戒律に従い伝統教団の生活を送っている尼僧道場として知られている。



4、戒律の勉強と実践が流行していること

現在省内に、戒律を勉強、実践する専門学堂が五カ所ある。これは他のところで見られない現象である。その中で、太姥山平興寺の戒律学堂、崇福寺律学班は人数が最も多く、影響力の大きい学堂である。これまで省内各地の寺院で全国規模の伝戒法会が総計21回も行われ、何千人の比丘比丘尼が生

まれた。多くの寺院で月に二回の布薩を実行して、戒本を読み上げ、正しく戒律を守っているかを反省させる。このように僧侶として戒律を勉強して守っていくのが最も大事なことであるというのが皆の共通認識のようである。これは、おそらく、近代の有名な戒律の高僧弘一法師や圓拙法師らが福建省で活躍し戒律思想を普及させた原因によるであろう。

弘一法師（1880～1942年）は近代律宗を復興したことで、南山律宗第十一祖に列せられている。天津に生まれ、日本に留学し東京の上野美術専門学校で西洋絵画や演劇、音楽を学び、中国に伝えた第一人者とされている。三十九歳の時に出家し、福建省を中心に活動した。厦門、泉州などで戒律を講じ、泉州開元寺に南山律学苑を設立するなど、僧教育に多大な貢献をなした。戒律を身をもって実践し、日本から『南山三大部』を取り寄せるなど典籍を校訂するとともに、「中国僧侶の宝」といわれている『四分律比丘戒相表記』をはじめ多数の著作を残している。

5、農禅一致の伝統を継承すること

福建省では、黄檗宗、臨済宗、雲門宗などの有名な禅宗道場が多くある。禅宗は座禅修行以外に農作業をする伝統がある。例えば、唐の道一禅師の、“一日不作、一日不食”という逸話が有名である。従って、観光寺院を除いてほとんどの寺院は田、茶畑、果実の農園などを持っている。特に福建省は茶の産地なので、多くの寺は茶を作っている。例えば福建省第一名山である武夷山の麓にある永楽寺や福鼎市の資国寺、臨海寺などは茶畑を有し、栽培から製造まで全部僧侶が自分たちでやっている。寺自体が一つの茶工場となっている。また、ウーロン茶の産地で知られている安溪の近くにある中華山性海寺は200ヘクタールの山林と茶畑を持っている。莆田市の広化寺にはライチなどの果樹800余株あり、山林と田は10ヘクタールある。このように、福建省寺院のほとんどの僧侶は朝晩の勤行、念仏座禅のほかに、農作業もするという自給自足の農禅一致の生活を送っている。これは禅宗の伝統を受け継ぎ、現在中国仏教が提唱した修行と働きを両立する思想を実践しているのである。

以上の特徴のほかに、福建省仏教は文化交流や社会福祉奉仕などの面においても活発に活動している。現在寺院や仏教協会が発行している雑誌と新聞は10種類あり、それは次の通りである。

雑 誌 名	出 版 者
『福建仏教』	福建省仏教協会
『閩南仏学院学報』	福建省閩南仏学院
『福鼎市仏協通訊』	福建福鼎市仏教協会

『音声海』	福建福鼎資国寺
『黄檗』	福建福清黄檗山万福寺
『法炬』	福建莆田広化寺
『慈霖月刊』	福建莆田市仏教慈善功德会
『慈善会弘法通訊』	福建泉州市仏教協会
『慈善』	福建厦門南普陀寺慈善基金会
『通訊』	福建省仏教協会

その中の、『福建仏教』は福建省仏教協会の機関誌で、全国的に影響のある仏教雑誌の一つである。『閩南仏学院学報』は福建省において唯一の仏教学術専門誌として知られる。社会福祉のために、慈善基金会が6カ所に設けられている。地震など自然災害の募金、就学困難な学生の学費と重い患者の医療費援助などの活動を行っている。また、省内に協会や寺院が経営している診療所が5カ所あり、一般人向けの薬の施しや治療をする。

仏教が発展すると共に信者も増え、現在省内には、信者の組織である居士林が二十数カ所に設けられている。そのうち全国の居士林のモデルといえるものが福鼎市にある。1997年、シンガポールの華僑の援助で、五階建ての広大な会館が建てられ、全国から集まってきた約50人ほどの若者がそこで共同生活しながら、布教活動などを訓練する。そこで学んだ青年たちが、故郷に帰って居士林を組織し布教活動を全国的に展開することになる。

このように、福建省仏教が文化大革命から完全に復興し、全国に先駆けて大いに発展し、中国仏教の重鎮となった。その原因は、以下のようにあげられる。

第一に、地理的に福建省は中央から遠かったこともあり、文化大革命による破壊が比較的軽微であったことである。文化大革命の最中でも、宗教活動が続けられたところもある。例えば、私の田舎では、僧侶は農場の生産隊に改編されたが、寺に留まることが許された。昼間に生産労働に参加するが、夜になると、仏画の上に被せた毛沢東のポスターをめくり、こっそりお勤めや礼拝、修行を続けていた。私の父も文化大革命の時、家の窓際に仏壇を作り、昼間は窓を開けると、その扉が仏壇を隠し、夜は窓を閉めると、仏壇がでてきて、勤行することができるようになっていた。ただ、ある日の朝、父がお勤めをしている時、ローソクの光が外へ漏れて、たまたまそこを通りかかった村の書記に発覚されて、三ヶ月間の強制労働をさせられた。皮肉にも、その書記が今たいへん熱心な仏教信者になり、よく寺に通い手伝いをしたり、居士を集まって念仏をしたりするそうである。

第二に、仏教が民間信仰と融合し、地域に根付いていたことである。福建省や台湾は航海の安全をつかさどる媽祖信仰などにみられるように鬼神信仰の

盛んな地域であり、仏や菩薩を神仙と同類とみなし、現世利益の信仰対象としてきたのである。

第三に、経済的理由である。福建省が広東省とともに全国にさきがけて経済の開放地区になったので、内陸より早くも経済が急速に発展して、人々の生活水準が向上し生活が豊かになったから、仏教を信じる余裕ができたのである。

第四に、台湾や東南アジアの華僑からの経済的援助があったからである。福建省は多くの華僑の故郷であるので、彼らは文革後の福建省寺院を復興するために多大な経済的支援を行ってきたのである。福州の西禅寺、泉州の承天寺、莆田の広化寺などはシンガポール、マレーシア、インドネシアの華僑僧の資金援助で立て直された。

第五に、近代において中国仏教の代表的高僧が福建省で布教活動し、その足跡と影響が現在も残っていることである。それらの高僧とは弘一法師、太虚法師、圓瑛法師、虚雲法師である。この四人の高僧について知っておくことは、近代、現代の中国仏教を理解するうえで不可欠である。次に、二カ寺を例として、その具体的な活動を紹介する。

三、戒律の専門学堂である平興寺

平興寺は、福建省第二の名山である太姥山のふもとにある。文化大革命の際、十数人の僧侶がこの寺で生産隊員として茶の農場を営んでいた。文革後、若者の出家者が少し増えたものの、やはり静な農禅一致の生活を送っていた。ところが、1991年、一人の若い僧が寺院に帰ってきたことで、寺は大いに発展し全国的に



有名な戒律道場となった。その若い僧は界詮法師である。界詮法師は1959年生まれ、今年52歳、1978年高校卒業後、この寺で出家し、1981年に北京の中

国仏学院に入学、1984年に卒業、その後福建省仏学院で教鞭を取るかたわら、戒律の研究を始めた。

しかしながら、彼は仏学院のような方式での僧教育は知識や学問の獲得には資するところがあるものの、僧侶としてのあるべき精神を育てられないのではないかと疑問を抱き、出家した寺に戻り、戒律を研究しながら、戒律に従う生活を実践しよう



とした。彼は、戒律が仏教の命であり、特に激しく変化する現代にこそ、戒律が必要であり、厳しく戒律を守れば、社会の濁流に流されることはないと考えた。寺に戻ると次の年に、戒律の専門学堂を開き、「謹遵仏制、恪守律儀、住持正法、利益有情」（謹んで仏制に遵い、律儀を厳守し、正法を住持し、有情を利益する）という宗旨を掲げ、寺院内の若者を対象として、戒律に基づき自分の考えた理想的な僧教育を試みた。1994年にその優れた見識と秀でた人柄が仏教界に認められ、福建省仏教協会の会長に選ばれた。しかし、



その後、政府との些末な付き合いに振り回されたくないとして、自ら会長を辞任して、一筋に僧侶の教育と戒律実践に没頭した。今の中国では、このように戒律を重んじ、名誉、地位、金銭に淡泊な若い僧は珍しく、評判となり次第にその名が知られ、各地から彼に親近（sevā）するため駆けつけてきた僧が増え、1998年に寺院を拡大改築し、特に受戒用の三壇戒壇も建設され、翌年古規にのっとり一ヶ月ぐらいの伝戒法会を挙行了たことで、戒律の道場として全国的に注目を集めていた。現在は約300人の僧侶が常住して、戒律の勉強と実践を行っている。このように、専門の戒律を勉強する学堂が設立され、普通の学校や学院と違い、休みの日がなく年次の休暇もない。ここで勉強するものはすべて自発的に駆けつけてきたのであって入試や募集を通して入ってくるのではない。入学の特別な条件はなく、原則として、寂しさに耐え、学堂の規則を厳しく守ることができ、また独学の能力がある者なら誰でも学堂で勉強することが許される。基本的に出入りは自由である。従って、学堂の厳しい生活に耐えられず出ていく者も少なくない。学堂は僧侶のレベルによって、初級班、中級班、研究班の三段階に分けている。学習内容は基本的に戒律典籍を中心に勉強するが、中観や唯識のような思想教理をも教えている。その具体的なテキストは『四分戒本』、『毘尼事義集要』『四分律藏』及び道宣律師の南山三大部（『四分律刪繁補缺行事鈔』『四分律比丘含注戒本』『四分律随机羯磨疏』）など、また、『中論』『維摩經』『八識規矩頌』『唯識三十頌』『攝大乘論』『大乘起信論』『金剛經』『賢首五教儀』『天台概論』などである。

普段の実践修行としては、朝晩の勤行以外に、比丘戒の定めた通りの作法をできるだけ実行する。例えば、月に二回の布薩（poṣadha upaśadha）、年に一回三ヶ月間の夏安居と自恣（pravāraṇā）を必ず実行する。また、念仏坐禅の摂心会、懺悔礼拝の法要も時々行い、心身を清め、僧侶としての精神を高める。



夏安居中の読経

今年の夏安居には全国から約600人の参加者があった。その期間中、毎日講座を開き、仏教の知識を教えると共に、戒律教育を普及しその重要性を強調するのである。年間行事として、不定期的に三帰依、五戒、八戒、菩薩戒及

び比丘戒などの伝戒法会を行っている。これまで大規模な三壇伝戒法会をすでに七回を行い、毎回平均200人ぐらい参加者がおり、これまでに1000人以上の比丘や比丘尼を育てた。

このように、戒律に基づいての僧教育は僧侶としての自覚を持たせ、信仰心を堅固にしたので、その業績は仏教界に認められ、平興寺は全国で最も有名な寺院となり、界詮法師も優れた僧として尊敬を集めている。

四、模範叢林である広化寺

広化寺は福州市から南約100キロ莆田市にあり、1400年の歴史を持つ古刹である。1980年代、寺院の秩序や修行環境が優れていることと、規則が厳格なことから「全国三大模範叢林の一つ」と評価されている。すでに30年が過ぎても、その模範とすべき様相は未だに続いている。現在、この寺院は主に以下のような事業活動を行っている。

1、福建省仏学院の運営

福建省仏学院は地方における代表的な仏学院の一つであり、1983年にこの寺に設置されて以来、28年間福建省仏教のために多くの人材を育成してきた。これまで1600名以上の卒業生を出している。そのうち百数十名が北京の中国仏学院に進み、多くは海外に留学するか、寺や各地仏教協会の要職に就き、国内外で活躍している。現在約120人が在学中で、予科班、本科班、研究班に分かれている。研究班は3年制で19人、本科班は4年制で、予科班は2年間で、両方を合わせて96人、講師は約26名いるということである。

入学条件は寺院生活の経験が一年以上ある十八歳から三十歳までの青年僧で、自ら申請し、現地の仏教協会の推薦状とともに3000字の自己紹介文を提出して試験を経て合格すれば許可される。学習科目は仏教全般から、政治、哲学、歴史におよんでいる。扱われている教科書は具体的に次の通りである。

予科班	沙弥律儀	遺教三経	成佛之道	勸発菩提心文	国語古訓	中国歴史	書道
本科班	俱舍要義	撰大乘論	往生論	西方哲学史	維摩経	無量寿経	四書
	俱舍論頌疏	百法明門論	唯識三十頌	唯識二十頌	印度佛教史	中国佛教史	作文
	教観綱宗	十二門論	古代漢文	中国哲学	金剛経	法律常識	
研究班	俱舍論	中論	浄土十要	南山律三大部	成唯識論	浄土五経	百論

2、仏経流通処

仏経流通処は中国において仏教經典を出版する最も規模が大きな流通処の一つであり、1979年に設置されて以来、30年の歴史を持っている。文化大革命の時、仏教經典はほとんど焼かれてしまったので、回復期の中国仏教には、全国的に仏教書籍が深刻に不足していた。そこで、広化寺はいち早く仏経流通処を設立して、經典を始め仏教基本知識の書物や仏画を再版、発行して全国の寺に無料で配布している。文字通り、經典を流通させることを目的とし、経済的利益を得るためではない。

現在、僧侶2名と21名の信者スタッフが専門に出版の計画、原稿の編集、校正などの作業に従事している。年間投入資金額は約1千万元で、500種類、200万冊の仏教書や仏画を出版発行している。この資金はすべて信者からの寄付金でまかなっている。低価格で販売もしているが、ほとんどは無料で全国の寺院に配布している。各地寺院本堂の本棚に置かれている書物のほとんどはこの寺から出版したものである。個人でも手紙でその流通処に連絡すれば、必要な書物は無料で送られてくる。

3、寺院生活体験サークルである『福慧の旅』

中国は急速な経済発展を成し遂げている一方、社会問題も多く露呈していることは否定できない。特に激しい競争社会となっている現在では就職が難しく、60%の大学生は卒業すると同時に失業に陥るという事実がある。また、貧富の格差や官僚



福州崇福寺の「菩提苗体験營」

の汚職などに対する戸惑い、人生への失望感、未来への不安感などの問題を抱える若者が少なくない。また、一人っ子政策で子供を甘やかすすぎて、行儀が悪く、利己主義といった子供の教育も深刻な問題となっている。そこで、このような社会世相だからこそ仏教としての役割を果たす必要があるとして、各地の寺院は子供や大学生、サラリーマン或は企業家を対象に寺院生活

体験のイベントを相次いで開催している。例えば、先に紹介した尼僧仏学院の所在地である崇福寺は子供を対象に「菩提苗体験營」というイベントを開催する。

広化寺の『福慧の旅』は主にサラリーマンと大学生を対象としている。2002年から始まり、10年間も続け、年に1回か2回のペースで開催されている。参加者は静かな寺院の独特な環境の中で、仏法を聞き、座禅体験し、自我を見



つめ直して、生命の価値を見だし、特に直接僧侶と対話して、人生について話せるということで、反響が非常に良く、評判となり応募して参加する人が殺到している。これまで12回開催し、合計12000人以上の参加者がいた。1回の参加者は平均1000人を超えている。

この『福慧の旅』に参加して、仏法に啓発され人生観が変わり、出家した大学生が少なくないそうである。現在北京郊外にある龍泉寺には、北京大学や清華大学などの出身大学生が10数人出家している。彼らのほとんどは出家する前、この『福慧の旅』に参加した経験がある。この一点だけでも、広化寺の『福慧の旅』という寺院生活体験イベントが大きな影響力を持っていることが伺える。

その他、広化寺は週末の居士教育や月に2回念仏摂心会の行事も行っている。毎週土、日に、周辺の居士を集めて、青年班と年配班に分けて、勉強会や念仏会、或は座禅体験を行うのである。毎回参加者は青年居士班が50名ぐらい、年配班が70名ぐらいである。この行事はすでに15年間も続けてきた。また、毎月5日と25日に、年配の僧侶が主導で居士も参加する念仏摂心会が行われ、200人以上は参加するそうである。

五、おわりに

最後に、福建省の仏教が日本仏教と深い縁を結んでいることを強調したいのである。周知のように、真言宗の弘法大師空海が初めて中国に上陸したところは福建省の赤岸鎮であり、また天台宗の慈覚大師円仁も福建省の連江県に上陸したのである。福建省から日本に渡った僧侶も少なくない。唐代には鑑真和上とともに来日した泉州超功寺の曇静法師は唐招提寺の戒師をつとめた。明代には福州崇福寺の高僧超然和尚が長崎で崇福寺を建立し、その後七代までの住職は福建省から派遣されている。また、隠元禅師は30人の弟子を率いて宇治に万福寺を建立し、黄檗宗の道場を開いた。万福寺の住職はながく福建省の出身者であった。

このように、福建省と日本は古くから仏教徒が頻繁に往来してきた交流の歴史がある。印度学仏教学会の第62回学術大会では、福建省出身の僧侶が3人も参加した。3人はともに日本の大学で仏教を学んでいる。2人はすでに博士号を獲得し、1人は博士課程在学中である。このように、日本仏教と福建省仏教は強い絆で結ばれているので、これからも仏教交流をますます深めて行くことを強く念じているところである。